

幼児教育史学会 会報

第 13 号

目 次

第 7 回大会報告

会長あいさつ

研究発表・シンポジウム

総会報告

大会会場校から 太田素子

大会参加記 福元真由美・浜田真一・金子嘉秀

会員研究情報 有働玲子

新入会員・会員移動

寄贈図書

第8回大会のお誘い 勝山吉章

新事務局から

第7回大会報告

宍戸健夫会長より大会挨拶があった後、研究発表・シンポジウム・総会が行なわれた。

研究発表

司会：小玉亮子(お茶の水女子大学)・吉長真子(福山市立大学)

- (1) ジョン・コレットの子ども観 大川なつか(白鷗大学非常勤講師)
- (2) 明治後期の広島女学校附属幼稚園における保育実践の検討
金子嘉秀(広島大学大学院)
- (3) 女子師範学校附属校園における幼小連携—モンテッソーリ法への対応と幼稚園カリキュラム—
杉浦英樹(上越教育大学)
- (4) 児童救済・保護の政治学—岡山孤児院解散・託児所令制定運動・富田象吉—
稲井智義(東京大学大学院)
- (5) 城戸幡太郎の幼児教育論—「15年戦争」期を中心に— 浅野俊和(中部学院大学)
- (6) 倉橋惣三と山下俊郎—現代の視野から比較を試みる— 坂入明(東京家政大学)
- (7) レッジョ・エミリア幼児教育実践の構築過程に関する研究—1970年代を中心に—
濱田真一(白梅学園大学大学院)

シンポジウム「保育実践史の中のプロジェクト・メソッド」

司会：太田素子(和光大学)

提案者：橋本美保(東京学芸大学)・鳥光美緒子(中央大学)・浅井幸子(和光大学)

コメント：宍戸健夫(愛知県立大学名誉教授)・中野光(元日本生活教育連盟会長)

第7回総会報告

報告事項

1. 第6回大会年度(2010. 10. 1~2011. 9. 30)会務報告
 - (1)会員数：2011年11月末現在139名 除籍(年会費3年未納)2名
 - (2)第6回大会：2010年12月4日、長野県短期大学にて開催された(参加者およそ45名)
 - (3)機関誌『幼児教育史研究』第6号の刊行
 - ・2011年11月30日に発行した。(発行部数200部)
 - ・委員長：古沢常雄(投稿論文担当)、副委員長：阿部真美子会員(書評担当)
 - ・投稿論文の総数は5本、うち研究論文1本、資料紹介1本を掲載した。
 - ・その他シンポジウム講演者の論文1本、書評・図書紹介計4本を掲載した。
 - (4)会報の発行：第11号を3月25日、第12号を7月4日に発行し。各ウェブ公開版を5月2日、7月24日にUPした。
 - (5)役員選挙：9月に実施し、監査立会いで第3期役員(理事10名、監査2名)を選出した。
 - (6)新会員名簿の作成：2011年11月30日現在の会員名簿を作成した。
2. その他
 - (1)大会の持ち方：発表申込者の増加に伴い、現行の一堂に会する方式では受け入れきれない場合、催日は原則1日とし、分科会方式を取る。(理事会提案)
 - (2)ウェブ公開決定前の会報公開：創刊号~第8号は公開されていないため、次期事務局が取り組む。
 - (3)機関誌のウェブ公開：機関誌編集委員会を中心に進行中である。

審議事項

1. 2011年度決算 別府愛理事(会計担当)より報告(略)
2. 新理事、監査
 - (1)選出された理事・監査は次の通り。(敬称略、アイウエオ順)
 - 理事：阿部真美子・太田素子・勝山吉章・小玉亮子・宍戸健夫・立浪澄子
楯瑞希子・別府愛・村知稔三・湯川嘉津美
 - 監査：高田文子・福元真由美
 - (2)12月2日の理事会において新役員を選出した(敬称略)
 - 会長：宍戸健夫 副会長：太田素子
 - 事務局長：村知稔三(2012年4月~2013年3月は阿部真美子が代行)
 - (3)新事務局
新事務局は青山学院女子短期大学子ども学科研究室に置く。
移転に伴う情報は次の会報に先立ってウェブ上で周知を図る。
3. 第7回大会年度(2011. 10. 1~2012. 9. 30)事業計画について
 - (1)機関誌『幼児教育史研究』第7号の発行(2012年11月刊行予定)
 - (2)会報の発行(年2回)
 - (3)第8回大会の開催
 - (4)機関誌のウェブ公開実施

4. 第8回大会年度（2011. 10. 1～2012. 9. 30）予算案（略）

5. 機関誌の編集

(1) 第7号の編集委員長、副編集委員長の選出

申し合わせに従い、正副編集委員長は1年交替とする。正委員長は翌年副委員長として残り、業務の円滑な引継ぎを図る。第6号の古沢常雄編集委員長の理事降板に伴い正副を選出。編集委員長（投稿論文担当）梶瑞希子、副編集委員長（書評担当）湯川嘉津美

(2) 投稿募集その他

編集規定に従う。会報の掲載内容に関しては編集委員会に一任。投稿原稿の締切は2012年6月30日（消印有効）、11月末刊行・発送予定。なお、2013年は締め切りが1か月ほど早まる可能性がある。

6. 会報の発行

(1) 発行時期：2月末頃（第13号、大会報告）、6月末頃（第14号、大会発表申込用紙同封）

(2) 内容：会員研究情報欄の充実に努める。

7. 第8回大会

会場：福岡大学（大会委員長：勝山吉章）

日程：2012年12月1日

幼児教育史学会第7回大会会場校として

太田素子（和光大学）

12月3日、70人を超える会内外の参加者をお迎えして、第7回大会を開催させて頂きました。和光大学のキャンパスは、隣接する玉川大学から分けて頂いた土地だそうです。緑豊かですが駅から15分上り坂、遠くからおいでいただくには少し不便だったのではないのでしょうか。会員3人と、学生数人でにわかに行実委員会を形成したのですが、私が不慣れで、ハラハラさせた場面も多かったのではないかと思います。ロビーに菓子やお茶を準備しようと道具を出したのですが、受付でモタモタしているうちに、いつの間にか綺麗にセットして下さった方がいて、きっと参加者がお手伝い下さったのだろうと感謝したようなこともありました。

午前中の自由発表は、締め切り近くにドドッと申し込みが届きました。理事会に「発表者が少ない」と応援メールを出すのが行き違いになってしまい、時間枠を超えた8人になって一時期はどうしようかと思いました。安易に分科会方式は取らないという申し合わせがあり、2分科会にすることはできなかったからです。総会で次回からは日本と海外というような機械的な分け方をしないなら分科会方式も採用可能という合意ができて、開催校が運営し易くなったように思います。

自由報告の内容にも午後のシンポジウムと関わり深いテーマで発表する者があるなど、全体として実践史、思想史など保育の理念や保育内容に関わる歴史研究が多かったことも印象的でした。

午後のシンポジウムは、「保育実践史におけるプロジェクト・メソッド」という限定したテーマに取り組みました。超多忙な中、この報告にとりくんで下さった、橋本美保会員、鳥光美緒子会員、浅井幸子会員には深く感謝申し上げます。簡単に三つを比較することなどできない、とすぐ悟りましたが、シンポジウムのテープ起こしを聞くと、改めて内容の深さに驚きます。ぜひ掲載誌『幼児教育史研究』が公刊されましたら、多様な角度から、皆さんに検討して頂きたいと思います。

当日は、中野光元日本生活教育連盟会長、宍戸健夫学会長のコメントはもとより、研究対象の小松福三さんまで意見を述べられるなど、一瞬7- 80年代くらいにタイムスリップした感覚にとらわれるほどでした。ご意見を戴きたいオピニオン・リーダーは他にも会場に多くお見えで、発言して頂けなかったことを後悔しております。木下龍太郎氏のコメント、「これを日本に持ち込むのは、まさに今までの保育実践の構造というか、今までの構造を壊してしまうかもしれないと思いました。大変なリスクを含んだものであるという受け止め方をした」しかし、実は「部分的なところででもできるんじゃないかというベアベッキの発言に一つのヒントを得た」というコメントが印象に残っています。広島大附属幼稚園の実践はまさにそれでした。自分たちはどのようなコンテキストの中で、レジジョ実践にヒントを得ているのか、自覚しておくことが大切なのでしょう。

ほかにも、及川平治や日生連の思索に幼年期教育の概念が自覚されていること、デューイやモンテッソーリの吸収の仕方の中に保育形態論を解く鍵があることなど、幾つものヒントを頂いています。会員の皆さんとの継続した議論を楽しみにしています。

大会参加記

福元真由美(東京学芸大学)

幼児教育史学会第7回大会に参加した。午前中は別所で仕事があったために、残念ながら研究発表を聞くことができなかった。このため、何とか午後のシンポジウムには間に合うように会場に向かおうと、足早にスクールバスに乗り込んだ。到着したキャンパスは、豊かな緑に包まれた高台に位置し、ゆったりとした建物の配置は自由な学風を醸し出しているように感じられた。

シンポジウムのテーマは「保育実践史の中のプロジェクト・メソッド」である。十数年前にレジジョ・エミリアが日本で大きく紹介された時は、センセーショナルと言ってもいいほどの感があった。日本の保育は1920年代以降にアメリカを中心とするプロジェクト・メソッドを経験している。にもかかわらず、なぜレジジョのプロジェクトは、近年の保育に目覚めを促すかのような語りで紹介されることになったのだろう。このような疑問を漠然と抱いていた私にとって今回のテーマは非常に興味深いものだった。

「広島大学附属幼稚園におけるプロジェクト活動」を報告された鳥光美緒子会員のレジジョに基づく幼稚園の実践研究は、これまでも拝読していた。今回の報告で研究の経緯を含むあるがままの取り組みを知ることができ、とても有意義だった。

橋本美保会員の「及川平治のプロジェクト理解と明石女子師範学校附属学校園におけるその実践」の報告では、同学校園における幼小連携のカリキュラム開発が、原理や方法・内容の探求のみならず、幼小の教員間の組織的な連携関係を生み出していたことが示された。今日の幼小連携において、教員間の共通理解や多様な見解や関係が研究対象になる中、歴史研究から様々な示唆が得られることに期待感を抱いた。

「和光幼稚園・和光鶴川幼稚園における『のりものごっこ』の成立と展開」の浅井幸子会員の報告は、「電車ごっこ」「のりものごっこ」を事例に1960年代から1970年代にかかる実践の変容を探るものだった。会場にいらした実践者の小松福三先生が当時の思いを語ってくださり、実践の継承の問題を深く考える機会となった。

最後に、大会全体の運営にもアットホームな雰囲気を感じられ、会員相互の交流を促

す場を作るという点でも学ぶところの多い大会であった。

金子嘉秀(広島大学大学院)

私にとって去年に続く2回目の参加となった今回の大会では、発表者として明治期の広島女学校附属幼稚園に関する管見を披露させていただきました。前年度の長野県立短期大学での学会にはじめて参加した本学会の印象が、各会員の発表の内容が充実しており、これに対する質疑応答における他会員からの指摘も率直で、時に厳しく、しかし会員同士の距離は極めて近くアットホームなものでした。そのため、当日は、歴史的研究を始めてから2年程度で得たわずかな知見を、その道で長らく研鑽を積んでこられた先生方の前で披露する緊張感とともに、どのような反応が得られるかというワクワク感の両方を持ちつつ、発表に臨ませていただきました。

今大会においては、杉浦英樹会員が明石女子師範学校附属幼稚園の発表で取り上げられたモンテッソーリの教育法に関する受容状況の検討内容、および学会シンポジウムでのプロジェクト法をテーマとし、各シンポジストの先生方が日本における歴史的知見を逐一挙げつつ検討を加えられた各幼稚園での保育内容が、「明治から大正期の幼稚園の保育内容・カリキュラムの検討」という点で私の発表とその背景にある興味・関心に近く、特に興味深く拝聴いたしました。

また、大川なつか会員のご発表のように、海外の特定の思想家の考えを掘り下げる作業という「時代」も「場所」も異なる研究内容であっても、日本における過去の思想家の思考を追う作業に通じる部分もあるように感じられました。そして各発表それぞれに、アプローチ・方法論上の工夫がなされた「幼児教育の歴史のどこかしらの一側面」への接近の試みを拝聴しつつ追体験することは、たいへん刺激的で得るものが多くありました。そして今大会でも、前回大会同様、おなじ「幼児教育史」という大きなテーマに取り組んでいるという連帯感、アットホームさが感じられ、大変心地よい時間を過ごさせていただきました。

浜田真一(白梅学園大学大学院)

和光大学や和光・和光鶴川幼稚園の先生方で組織されているイタリア研究プロジェクトに参加させていただいているご縁で今大会のことを知り、発表させていただきました。

今大会に発表者として参加し、痛切に感じたことは、歴史研究に求められる厳正さでした。他の方の発表を伺い、証拠となる膨大な資料を収集・読解し、綿密に論を構築する姿勢に圧倒されました。私は、1970年代におけるレッジョ・エミリアの幼児教育実践構築過程について発表しましたが、他の方の発表を伺い、また、自分の発表にご意見をいただき、自分の発表は歴史研究としてふさわしいといえるのか、深く考えさせられました。割合新しい分野であり、日本とは全く異なる文化、言語で実践されているレッジョ・エミリアの幼児教育を歴史的に研究することは、覚悟のいることなのだという事を思い知らされました。しかし、それを知ることができたことは、私にとってとても有意義なことでした。

そして、午後のシンポジウムは大変興味深く、貴重な情報を数多く得られたとともに、「幼児教育における[プロジェクト]とは何か」ということを自分の中で問い直す契機とな

りました。明石女子師範学校附属幼稚園、和光鶴川幼稚園、広島大学附属幼稚園で実践された「プロジェクト」はどれも先進的でしたが、時代背景、場所、目的などの条件によって、それぞれがかなり異なる性質を持っていて、また会場からも、プロジェクトの本質について様々な意見が挙がりました。そのような議論に参加しているうちに、「プロジェクト」とは、例えば「探究的な活動」、「子どもと大人の共同」、「柔軟に生成発展していく」、「没頭するような活動」といった諸要素のうち、何が揃っていればそれは「プロジェクト」といえるのだろうか。「プロジェクト」が和光鶴川の「電車づくり」実践のように、自然に発生した願いや要求を共同で紡ぎあげていくうちに成立するものだとすれば、「プロジェクト」的な活動を意図した瞬間に「プロジェクト」の本質的な部分が失われることにはならないのだろうか。もしそうだとすれば、そのジレンマはどのように乗り越えられるものなのか。「プロジェクト」とはどのような目的のもと実践されるのだろうか。そのような問いが湧いてきました。そして、それぞれの時代、それぞれの場所で実践されてきた一つ一つのプロジェクトが、どのような目的のもと、どのような過程で実践されたのか、更に知りたいと思いました。

発表とシンポジウムを経て、自分自身が今後どのような課題を持って、どのような態度で研究に向き合うのかということが、少し具体的に見えてきたように感じました。そのビジョンは、親睦会で様々な方々と交流することによって更に深まったように思います。親睦会は本当に楽しく、有意義なものでした。

大会の一日で本当に豊かなものを数多く吸収することができたように思います。

会員研究情報

拙著『話しことば教育の実践に関する研究—大正期から昭和30年代の実践事例を中心に—』（風間書房、2011年。A5版、540頁、1万8375円）について 有働玲子（聖徳大学）

1. 本書の背景

本書は学位論文「話しことば教育の実践に関する研究—大正期から昭和30年代の実践事例を中心に—」に加筆修正を行ったものである。本書によって、話しことば教育実践の生成と発展の過程を自己表現という観点から解明を試みている。

その全体の見取り図も掲載されており、歴史的事実の関係性整理をも行っている。

研究は「可能な限り第一次資料に基づいて分析し、その意義について考察をおこなう」（1[以下、本書の頁数]）という姿勢に立ち、さらに表現としての「話しことば教育」の解明を行った。子どもたちはどのように表現して指導者はどのような指導を行ってきたのか。そのことを「自己表現」（319）という切り口から近代国語教育史を再構築したのである。

なお、この主題に取り組んだ動機としては次の3点が挙げられる。第1は、修士論文の発展的な解明である。ここでは概論的に明治期から昭和戦後期までの独話・話し合い・お話等を網羅的に扱っていた。それらを通して本論の問題意識を焦点化し、鮮明にすることができた。第2は、貴重な第一次資料との出会いである。例えば、子どもの肉声が録音されている大正期の綴り方SPレコードとの出会い等はその一例である。このような第一資料との出会いが論証の一助となったのである。第3は、継続的な発表である。先述の第一次資料との邂逅を得て、多くの発表を行い多大な助言をいただくことができた。その結果、複眼的な観点を取り入れることができるようになったと思われる。以上、3つの

内的動機に支えられ、まとめることできた。

2. 本書の構成

先行研究に窺える時代区分から独自の時代区分を示す(目次は出版社のHPや紀伊国屋書店のBookWebProなどを参照)。

3. 本書の概略

3-1「話しことば教育の実践の模索期」

大正期の特徴的な実践として、下位春吉と水田光の口演童話指導論を取り上げる。口演童話は「児童のお話を聞く力、理解する力を高めるという今日の課題と結びつく」活動である。さらに成城小学校の「聴き方科」と奥野庄太郎の実践を取り上げ読み聞かせ実践の今日性を説く。

さらに東京高等師範学校飯田恒作の話し方教授論を取り上げ、「昔話より取る話方教材」「児童の全生活を範囲とする話方教材」を開発した点を高く評価する。児童の内面表現を教材化したからである。また、綴方指導へと収斂させていった事実を指摘した。

次には、広島高等師範学校附属小学校訓導として卓越した綴り方指導論を形成した友納友次郎の話しことば教育実践を取り上げる。友納は「内的発表」の命名のもので話しことば教育においても「想」の指導が存在することを発見した。」また、話材の整頓も図り、児童の生活に密接に関係したものが精選されている。

飯田と友納とに共通する発想は、話し方指導と綴り方指導とを分離せず、統合しているという姿勢である。飯田の提唱した「表現科」(61)の真髄と言えよう。

3-2「話しことば教育の実践の発展期」

飯田は昭和初期の状況を次のように嘆く。「話方教育は読方に附帯して行ふという伝統的な見方と、研究法に難点があるのと、指導の組織がないことによって、何時も不振の状態を続けている。(100)」飯田による脆弱な状況の指摘は的確であるが、実践事例がないわけではない。

柏熊俊司は児童の独話発表内容を精密に記録しており、「『生活語』を提唱し」(95)た。

また、峰地光重は池袋児童の村小学校において、話材系統案を策定し、尋常小学校1年生から4年生まで特設の話聴教育を実施しているのである。

秋田県の遠藤熊吉の実践に関しては「文字、文章による言語生活以前に、音声に基づく言語生活があることへの注目」「言語活動の本質は音声による言語に存するという認識」(102)の2点の先駆性を説く。

この時期には児童を対象とした視聴覚教材が登場する。たとえばラジオ聴取用の「子供のテキスト」を資料として放送内容を精査し、ラジオ活用を行った奥野庄太郎を取り上げていく。また、児童による朗読や綴り方のSPレコードが制作されており、その読みぶりや息遣いの聴解を試みている。

これらより国語教育史における未解明な分野を切り拓いたといえよう。

3-3「話しことば教育の実践の雌伏期」

この時代は周知のように、「皇国民の育成のもとに教育統制が徹底された時期である」(141)。しかしながら、目的達成のため技術論は練熟し、「一定の価値を注入するための教材配列技術こそ国民学校期の特質として指摘すべきである」(149)と指摘する。

具体的な実践事例の解明としては東京府杉並第五国民学校の話しことば教育実践を精

査した。それらより戦中から戦後へ至る連続性を見出した。同学校では戦時中から、児童の生活場面に即しつつ言葉の公共性を学習させていたからである。また、「一方的な単語や文型学習に陥らず、児童の疑問を引き出しながら指導」(199)を行い、「入門期のことばの学習の基本である、メタ認知」(199)の機能も十分に考慮された学習が存在したのである。なお、同校の授業は1946年3月15日にアメリカ教育使節団一行に参観され、戦後に学習スタイルは継承されていった。

3-4「話しことば教育の実践の復興期」

当時の日本の話しことば教育は、アメリカ教育使節団及び CIE(民間情報教育局)との邂逅から開始する。サジェッションの内容理解に苦心し、日本側はアメリカ流新教育を咀嚼していく。

その過程において、構築された昭和20年代の話しことば教育実践理論は思考・社会行動・語法・人間関係などの多方向に展開していく。

具体的な実践事例の解明としては、杉並区の『国語科における指導技術』資料をもとに試みている。

4. 本書の意義

話しことば教育が内包する、言語発達の可能性ということについて歴史を借りて物語ったのである。

なお、幼児教育との関わりを考えるならば、大きく2つの視座が窺える。1つはお話の手掛かりであり例えば、第1章第2節の「口演童話」の内容である。ここでは、児童に聞かせるお話を扱ってはいるが幼児に語るお話との重複が見えるのではないかと思われる。2つには、幼・小関連に関わる、書きことば以前の話しことば表現指導の多様な手掛かりを、例えば第4章第4～5節の実践等には見ることができよう。ともあれ、本書を用いて多様な読み取りが可能であろう。

新入会員・会員異動(略)

寄贈図書

宮沢康人『〈教育関係〉の歴史人類学—タテ・ヨコ・ナナメの世代間文化の変容』(学文社、2011年8月。268頁、2415円)。

竹内通夫『戦後幼児教育問題史』(風媒社、2011年10月。444頁、6825円)。

鈴木昌世『イタリア人と母—母性愛・教育者・聖母マリア』(サンパウロ、2009年3月。244頁、3360円)。

第8回大会のお誘い

勝山吉章(福岡大学)

本年12月1日に第8回大会を福岡大学で開催することになりました。福岡大学については、みなさんほとんどご存じないと思いますので、若干の紹介をさせていただきます。私も名古屋大学から赴任する際に「そんな大学あったの」と思ったぐらいですから。

福岡大学は1934年に設立された福岡高等商業学校を前身校としています。同校はアジア侵略への地政学上の拠点であった福岡(博多)で、大陸経営の専門家を育てたいという博多商人の意図によって設立された私立の専門学校です。戦後は経済成長の波に乗って拡充し、人文・法・経・商・商(二部)・理・工・薬・医・スポーツの10学部と法科大学

院を含む10研究科からなり、2万2千人の学生が在籍する中・四国九州圏で最大の私立大学となっています。ですから「九州の日本大学・近畿大学」と理解してもらっています。

さて、わざわざ九州にまで来て下さる会員みなさまに、どのようなアカデミックなご招待が出来るかと苦慮しております。まずはシンポジウムについて。今のところ、九州地区の長老的な保育実践家に保育運動を歴史的に振り返って報告してもらうことを考えています。戦後の福岡は、朝鮮戦争において米軍の最先端基地となり、三井三池の闘いと共に経済成長を迎え、水俣病や北九州工業地帯などの公害問題、炭鉱閉山による旧産炭地の困窮化などの諸問題が渦巻きました。そのようななかで、保護者とともに保育をつくる運動が力強く行われ、自主的・民主的な保育園の設置、自主的・民主的な保育研究会の発足などが繰り返されました。シンポジウムでは、このような保育の実践家に生きた保育運動の歴史を語ってもらおうと思っています。

次に自由研究発表ですが、第7回大会において報告者多数の場合は分科会方式をもつことが提案されました。分科会にしなくてはならないほど多数の報告があればいいと思うのですが、みなさまの積極的なご報告をお願いします。

福岡(博多)は、東京よりも朝鮮半島や大陸に近いところに位置しているためか、様々な文化が組み込まれて飽きない町です。東京など東日本で活躍する福岡出身の芸能人が多いのも、博多の文化が影響しているでしょう。また、食が新鮮で温泉が多いなど、町全体が行楽地といっても過言ではありません。その辺の銭湯が天然温泉になっても誰も驚きませんから。ですから是非、半分観光気分でおいでくださればと思います。

例年12月上旬には福岡国際マラソンが行われます。学会当日のホテル不足が予想されますので、お早めに宿泊先を確保して下さるようお願いいたします。

事務局から

(1)挨拶

第7回大会において私どもが第3期の事務局に選出されました。その場でもお話ししたように、初代事務局長の湯川会員が基礎を作られ、2代目の榊会員が発展させられた事務局体制、引いては本学会を3年後まで存続させることを最低限の目標に日々、努めます。

今期が終了する2014年12月には第10回大会が予定されているので、学会10周年を記念する企画に継続的に取り組めたらと考えています。原案が具体化しましたら皆様にお知らせしますので、お力を貸していただけましたら幸いです。

同時に、会員数も徐々に増え、組織面での若干の見直しも求められています。第4期以降を展望して、こうした課題にも着手するつもりです。

近年の社会状況、とりわけ大学や研究機関をめぐる現況を見ますと、さまざまな問題を原理的に考察する姿勢が弱まり、雰囲気が消えつつあります。そうしたなか、そもそも歴史研究はなぜ必要なのか、そのあり方はこれまでとどう異なるのか、などが問われているかと思っています。その意味で本学会の学問的・社会的意義は増すとともに、学会全体としても、会員個人としても、研究の中身や発信の仕方を自省する必要性がこれまで以上にあるでしょう。本学会のさらなる発展のため、どうぞよろしく願いいたします。

(2)会費納入のお願い

第7回大会年度(2011年10月1日～2012年9月30日)の会費納入用振込用紙を昨年11月末

に機関誌発送時にお送りしました。会報第12号に振込用紙を同封したのは2012年2月25日時点で第7回大会年度とそれ以前の会費未納の方です。行き違いはご容赦ください。

(3) 会報原稿の募集

「会員研究情報」「海外幼児教育だより」「提言」などを3000字程度でメールまたは郵便で、なるべくデータを付けて事務局宛にお送りください。年2回の会報発行時(2月、6月を予定)までに届いた分を随時掲載します。

(4) 名簿の作成と所属・住所変更届のお願い

春は異動の多い季節です。本学会の会報・機関誌はメール便を使っておりますので、住所変更のご連絡がない場合はお届けができなくなります。必ず変更届を提出ください。

幼児教育史学会会報 第13号 2012年3月7日 編集・発行 幼児教育史学会事務局 村知稔三・阿部真美子 150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 青山学院女子短期大学子ども学科気付 Tel:03-3409-7337/Fax:03-3409-3985 E-mail:admin@youjikyokushi.org / HP: http://youjikyokushi.org 郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会
--